

東海地方の瓦について

名古屋城で発掘調査を行うと出土する遺物の内70%から80%が瓦類で占められています。通常近世の遺跡では生活に用いる日常什器である磁器・陶器・土器などのやきものが多く出土しますが、名古屋城内ではほとんどの地点で瓦類の出土が多い傾向にあります。これは発掘調査を行った場所の近くに瓦葺きの建物が存在していたことと、城内で生活を営んでいる人が少なかったため生活で発生するゴミの廃棄が行われなかったことが背景にあります。

尾張国は国内に常滑や瀬戸といった窯業地が存在していたこともあり、地元で生産した製品が地元で流通し消費される地産地消状態にあったと考えられます。名古屋城で出土する瓦類も地元である東海地方で作られた瓦が使用されました。

東海地方では名古屋城下町のほか、知多郡（現常滑市）、三河国碧海郡（現碧南市・刈谷市・安城市・知立市・高浜市）、伊勢国桑名郡（現桑名市）・伊勢山田（現伊勢市）、美濃国不破郡（現垂井町・関ヶ原町）などの場所で瓦が作られていました。

東海地方で生産された瓦は生産場所が多いため具体的な特定が難しいですが、東海地方で生産される軒平瓦と軒棧瓦には樹枝および点珠を組み合わせた花文が描かれていました。そのため考古学においては、この文様を東海地方で特徴的に見られる文様ということで、東海式と呼ぶことによって他の地域で作られた瓦と区別をしています。

東海式は18世紀以降に成立した文様と考えられており、名古屋城や名古屋城下町は勿論江戸城下

町や京都周辺でも出土しています。瓦は磁器や陶器と異なりそれぞれの地域で作られ、使用されていることが多いため、広い範囲で出土している瓦は多くありません。

しかし尾張藩は地元の製品を出先に運び込むことが特に多く、江戸藩邸の上屋敷や中屋敷、京都藩邸の吉田屋敷などの発掘調査でも東海式の瓦が出土しています。このような発掘調査で出土した資料を分析することによって、出土品がどのように使用されていたのか、どのような流通状態であったかを知ることができ、文字資料に記載されていない当時の生活実態に迫ることができます。

瓦の破片一点や一地点の発掘調査で分かることは多くないかもしれませんが、様々な情報を蓄積させ考えることによって、文字資料とは異なった観点から当時の実態に迫ることができます。考古学は出土した資料を分析することによって、過去の出来事を再現し今に活かすことを目的とした学問なのです。（学芸員 濱崎健）



▲名古屋城西之丸で出土した東海式の軒平瓦



名古屋城 調査研究センターだより

第6号 2025 3

名古屋城発掘調査開始50周年

名古屋城における最初の発掘は昭和50年(1975)に名古屋城の二之丸庭園で行われました。当時の名古屋市は急速な都市開発が行われており、この発掘は十分な体制で実施することができませんでした。この結果を基に学芸員が主導した発掘調査が翌年と翌々年に行われました。この3次にわたる発掘調査によって二之丸庭園の南池が整備され、さらに名勝範囲拡大のきっかけの一つにもなりました。

1970年代は日本各地で開発に伴う発掘調査が盛んに行われ、近世の城や城下町の発掘調査が盛んにおこなわれ始めた時期でもありました。名古屋城でも二之丸庭園の発掘調査以降、名古屋市教育委員会や愛知県による三之丸の大規模な発掘調査が繰り返し行われました。また、2000年代に入ると本丸御殿の復元や二之丸庭園の整備や木造天守復元に伴う発掘調査が毎年のように行われています。

最初期の発掘調査では二之丸庭園の南池や北池東端など近代に完全に失われていたと考えられていた遺構が多く確認できました。また、施釉された瓦が大量に出土し、二之丸庭園が他に類を見ない独特な庭園であったことが明らかになりました。

二之丸庭園の整備に伴う発掘調査は今後も長期にわたって続く見込みです。

名古屋城調査研究センターは設立してから6年が経過し、調査研究センター実施の発掘調査は20

回を越えました。これからの50年に向けてこうした成果をいち早く公開できるように務めます。

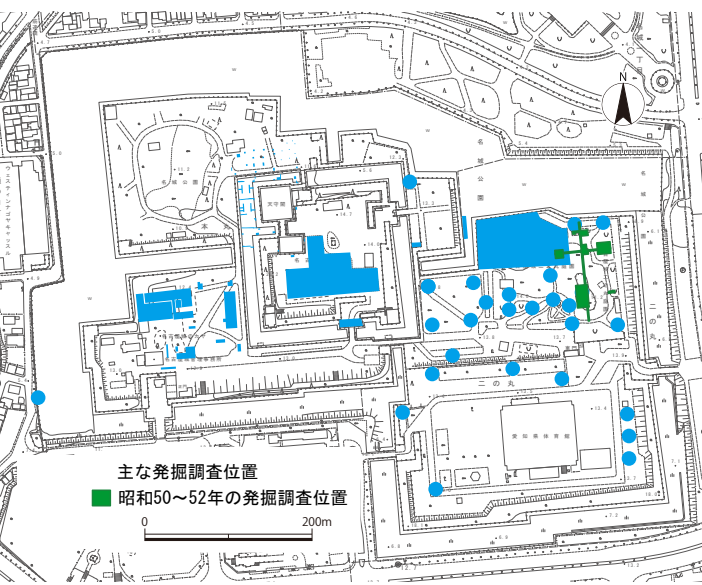
（学芸員 高橋圭也）



▲二之丸庭園南池出土施釉軒丸瓦



▲二之丸庭園南池発掘調査写真



尾張藩主の名古屋城視察 「御巡覧留・御巡覧留続篇」を読む

名古屋城の御巡覧と巡覧記録

慶長 20 年（1615）に完成した名古屋城の本丸御殿は、当初は尾張藩初代藩主である徳川義直^{よしなお}の居館として使用されましたが、元和6年（1620）に義直が二之丸に居所を移してからは将軍が名古屋に来訪した際の宿館とされました。将軍専用の曲輪であった本丸への立ち入りは制限されていましたが、名古屋に藩主として初入国したときなどには、特別に本丸を中心に名古屋城内を視察する御巡覧が実施されました。

幕末の尾張藩士である奥村得義^{かつよし}が編纂した「国秘録 御巡覧留」と「同 御巡覧留続篇」⁽¹⁾には、8代宗勝^{むねかつ}から14代慶恕^{よしくみ}（慶勝^{よしかつ}）までの藩主や世嗣（跡継ぎ）^{せいし}が実施した御巡覧の記録がまとめられています。これらの記録により、巡覧経路や案内役を担った家臣のほか、本丸御殿の御書院（上洛殿）や大天守最上階で行われた君臣間の対面儀礼のことが詳細に分かります。

御巡覧の経路・行事内容・目的

巡覧記録に従って、視察ルートを見ていきます。詳細な図面が残っている9代宗睦^{むねちか}の世嗣・治休^{はるよし}（1753～73）が安永元年（1772）に実施した御巡覧を例にします。まずは日常の居所である二之丸御殿を出発して本丸御殿に向かい、本丸の警衛責任者である御本丸御足軽頭^{ごほんまるおんあしがら}⁽²⁾と対面儀礼をおこないました。その後は本丸御殿から天守に入り、最上階では御巡覧の責任者である御城代^{ごじょうだい}や重臣^{おとしより}である御年寄と対面儀礼をおこないました。

対面儀礼では、藩主と家臣が対面して熨斗鮑^{のしあわび}の下賜^{かし}がおこなわれました。名古屋城の象徴である天守で重臣たちと君臣関係の確認をするのが目的であったとみられます。また、御本丸御足軽頭は中級家臣でしたが、名古屋城の中樞である本丸の警固をする家臣として藩主と対顔して熨斗鮑を授かる栄誉に浴しました。その後、御深井丸^{おふけまる}や西之丸にある各蔵を視察して二之丸に戻りました。

御巡覧自体は藩主が名古屋城内を視察する単純な行事に見えますが、新たな藩主や世嗣が形式的に名古屋城および尾張藩を継承することを目的として実施された重要な行事でした。御巡覧に関する記録は江戸時代の名古屋城における文化を知るうえでも貴重な史料であるといえます。



図2 天守最上階一之間・二之間(ガラス乾板写真)

空襲焼失前の名古屋城天守最上階を写した古写真。長押上には「熨斗鮑」と書かれた長方形の木箱が並んでいる。（名古屋城総合事務所蔵）



図3 再建本丸御殿上洛殿上段之間・一之間

2018年に再建された本丸御殿上洛殿。江戸時代には御書院と呼ばれていた。本丸御殿を視察した藩主は上段之間に着座し、対面儀礼をおこなった。

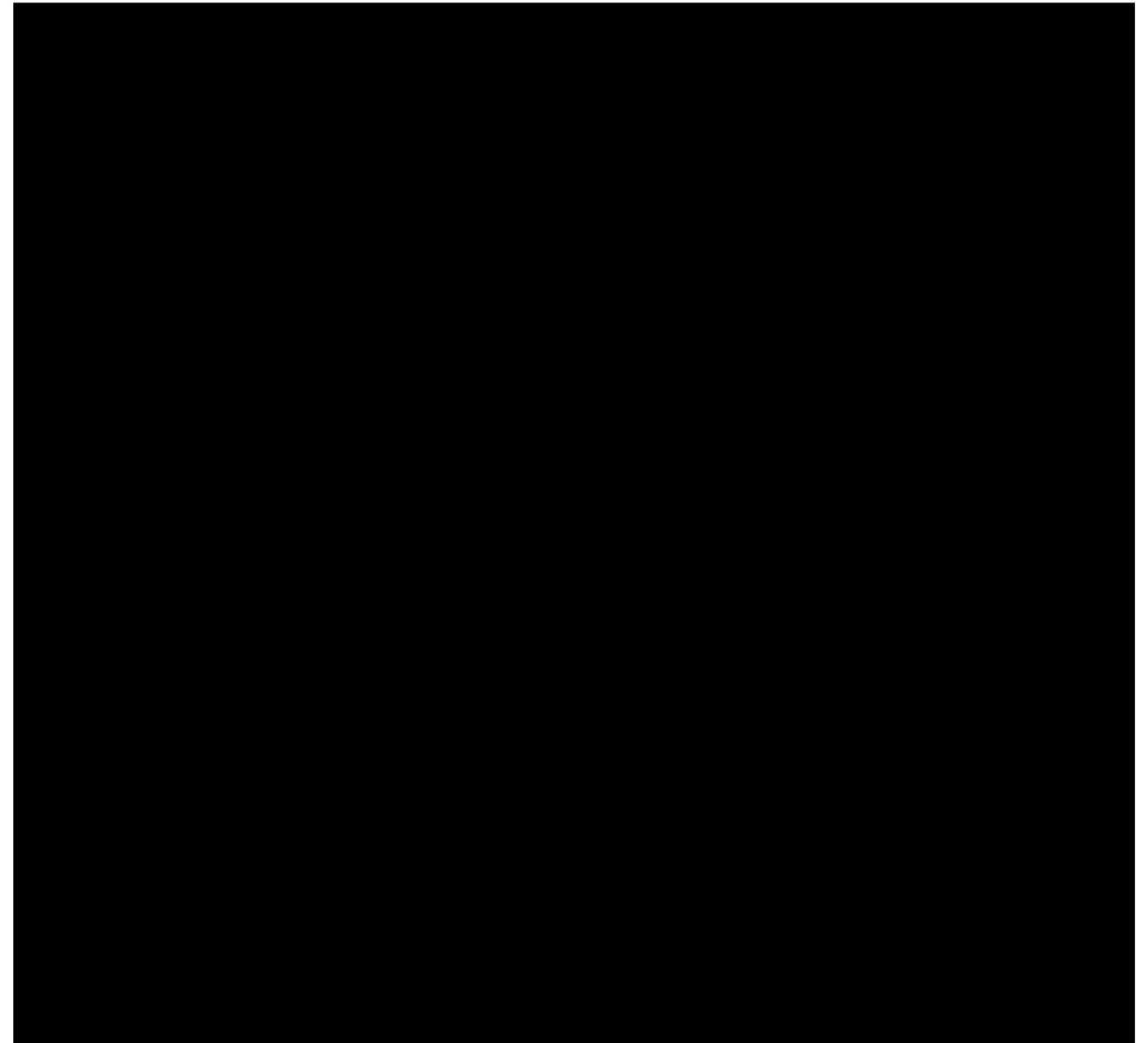


図1 「国秘録 御巡覧留続篇」安永元年（1772）徳川治休巡覧図（徳川林政史研究所蔵）、一部筆者加工

徳川治休^{はるよし}が尾張徳川家世嗣として名古屋城を巡覧した際の図面。巡覧の際に視察する本丸・御深井丸・西之丸が描かれている。赤線で巡覧時の通行ルートが示されているほか、貼紙で家臣が藩主および世嗣を出迎える位置が示されている。どの時代も巡覧ルートはおおむね変わっておらず、天守や本丸御殿での対面儀礼も実施されていた。

- ① 二之丸御殿：藩主が日常の住まいとしていた
- ② 大手馬出^{うまだし}：御巡覧に参加する案内役の家臣が藩主を出迎えた
- ③ 本丸御殿：御書院（上洛殿）で御本丸御足軽頭と対面儀礼をおこなった
- ④ 大天守：最上階で御年寄や御城代と対面儀礼をおこなった
- ⑤ 本丸多門櫓・隅櫓：具足蔵・檜蔵・糯蔵（非常食用の蔵）を視察した^{ほしいい}
- ⑥ 御深井丸：鉄砲などの武器蔵であった三階櫓（西北隅櫓）や火薬蔵を視察した^{かまえ}
- ⑦ 西之丸：年貢米を収めた米蔵構や西端にあった月見櫓を視察した

【註】（1）徳川林政史研究所蔵 （2）寛政5年（1793）以降は御本丸詰物頭^{ごほんまるづめものがしら}に改名（学芸員 堀内亮介）